

アオリイカがあふれる前浜を目指して

伊東市漁協伊東地区青壮年部
副部長 加納 隆

1 地域の概要

伊東市は伊豆半島東部に位置し、天城連峰を背に、前に相模湾を抱く豊かな自然と全国第4位の湧出量の温泉に恵まれている。このため、山の幸や海の幸、さらに温泉に憩いを求めて首都圏を中心に伊東市の人口の100倍余の800万人もの観光客が毎年訪れている。

2 漁業の概要

伊東市漁業協同組合は、平成6年に市内5漁協が合併し、伊東に本所を、宇佐美、川奈、富戸、赤沢の各地区に支所をおき(図1)、現在は正組合員455名、准組合員1,290名の組合員により構成されており、伊東港を水揚げ基地として、沿岸の釣り、定置網、刺網、採介藻および沖合の棒受網、巻網等によりキンメダイ、アジ、サバ、イワシ等を漁獲し、平成9年には約1万3千トン、約27億円を水揚げした。

3 研究グループの組織と運営

伊東市漁協伊東地区青壮年部は、昭和35年に設立され、現在棒受網、一本釣り漁業者を中心に17名の部員で構成されている。

部員は、多岐にわたる漁業種類に従事しており早朝、昼間、夜間と従事時間がそれぞれ異なることから、活動は主に休漁日を中心に行ない、これまでにワカメ養殖、モズク養殖、アオリイカの産卵礁造成、複合育成礁、マダイの種苗放流、小学生の体験乗船などに取り組んできた。部の運営は、会費と漁協よりの助成および活動に伴う売払収入を財源として成り立っている。また、宇佐美支所、富戸支所、川奈支所にも青年部が結成されており、部員数はそれぞれ21名、10名、14名で構成され、活動テーマについては、支所ごとに検討されている。

4 研究・実践活動課題選定の動機

伊東市地先には主に5～7月にかけて産卵のためにアオリイカが来遊し特産品となっているが、そのアオリイカの増殖のために昭和53年度以降、広葉樹の枝葉を束ねたそだの投入による産卵礁造成を行うなど努力してきた。

これまで、毎年1回投入してきたそだには、アオリイカの卵が付着している状況が潜水調査等により確認されてきた。しかし、そだの最適な設置水深、耐用日数についてはよくわかっておらず、これまで行ってきた投入手法についてはそれらを検討することで改善の余地があるものと思われた。また、交接後は産卵に無関係な雄や産卵後の雌については、選択的に漁獲することで水揚げし、有効利用できないかと考えるに至った。

5 研究・実践活動の状況及び効果

試験区設定のための潜水作業および水中のそだの観察には多くのダイバーが必要なので、

まず、ダイビングのインストラクターである青年部長により、部員に対しダイビングの指導が行われた。その結果、新たに9名が潜水できるようになり、それらを含む部員によって以下の試験が行われた。

(1) そだの最適な設置水深の確認

水深の深い場所では、そだよりも産卵かごの方が敏速、安全に設置できるので、伊東地先に産卵かごを10、20、30、40m深に平成10年5月9日に設置し、6月5日、6月15日、6月29日に潜水により産卵状況を調査した。その結果、図2のように20～30m深で多く産卵がみられ、40m深でも10m深に比べて多く産卵がみられるなど、これまで20m以浅で多く産卵されるとの考え方と異なった結果が得られた。

(2) そだの産卵礁としての寿命の確認

設置後のそだは時間の経過とともに葉が枯れ落ち、また、残った枝にフジツボ等が付着するとせっかく投入してもそだには産卵しないと言われているが、それらを確認するために、川奈地先の水深10m深にそだ100束を平成10年4月20日に投入し、うち12束について7月26日まで概ね15日ごとに潜水し状況を観察した。

設置後約1ヶ月半後の5月31日にはそだの葉が枯れ始め、また、枝にフジツボが付着し始めた。その約半月後の6月18日には更にそれらの進行がみられたが、同時に産卵数のピークも確認された(図3)。それ以降は新規の産卵は少なく、また、7月26日まで卵がみられたことから、約3ヶ月は産卵基質としてそだが機能していたものと考えられた。

(3) アオリイカの有効利用のための漁獲試験

伊東地先の水深10m深になぎの良い時は1人でも網揚げのできる小型の定置を張り立て、平成10年4月13日～7月24日の間、概ね毎日網揚げを行った。張り立てた水深が浅いこともあってか合計37Kgのアオリイカしか漁獲できなかったが、小型の個体には標識を付けて放流するなど個体を識別しながら選択的に漁獲できた。また、副次的に漁獲されるスズキやカワハギ等は市場に出荷し、活動資金に上乗せすることができた。

6 波及効果

水産試験場の調査によるとアオリイカの産卵適水温は16℃以上と言われており、その水温環境が整った時期に10～40m深程の水深にそだを設置することで、地先の海面を産卵場として広く利用できることがわかった。また、これまで年1回投入してきたそだも、16℃以上の水温が継続する場合には3ヶ月後に再投入するなど設置水深や投入間隔の工夫をすれば、より効率良く産卵礁として機能させることができると考えられた。

また、産卵礁に集まるアオリイカを小型の定置で漁獲すると、大型の個体のみを選択的に漁獲し、小型の個体や雌のアオリイカを生きた状態で放流することができ、手間はかかるものの、漁業資源としてのアオリイカの有効利用の方法の一つをさぐることができた。

7 今後の課題

今後も海洋環境の保全により天然藻場群落の創出に努めていくが、それに加え、そだ礁や人工産卵礁を効率良く設置し、アオリイカ資源の増加を目指していきたいと考えている。

また、同時に、漁業資源としてのアオリイカの有効利用を一層はかれるよう小型の定置の他、籠、釣りなどの選択的漁法の開発を試み、これらによって得られる、すばらしい海の恵みを伊東を訪れる観光客に提供することなど、観光協会等とも密接な関係を取りながら漁業収入の増大を図っていきたい。

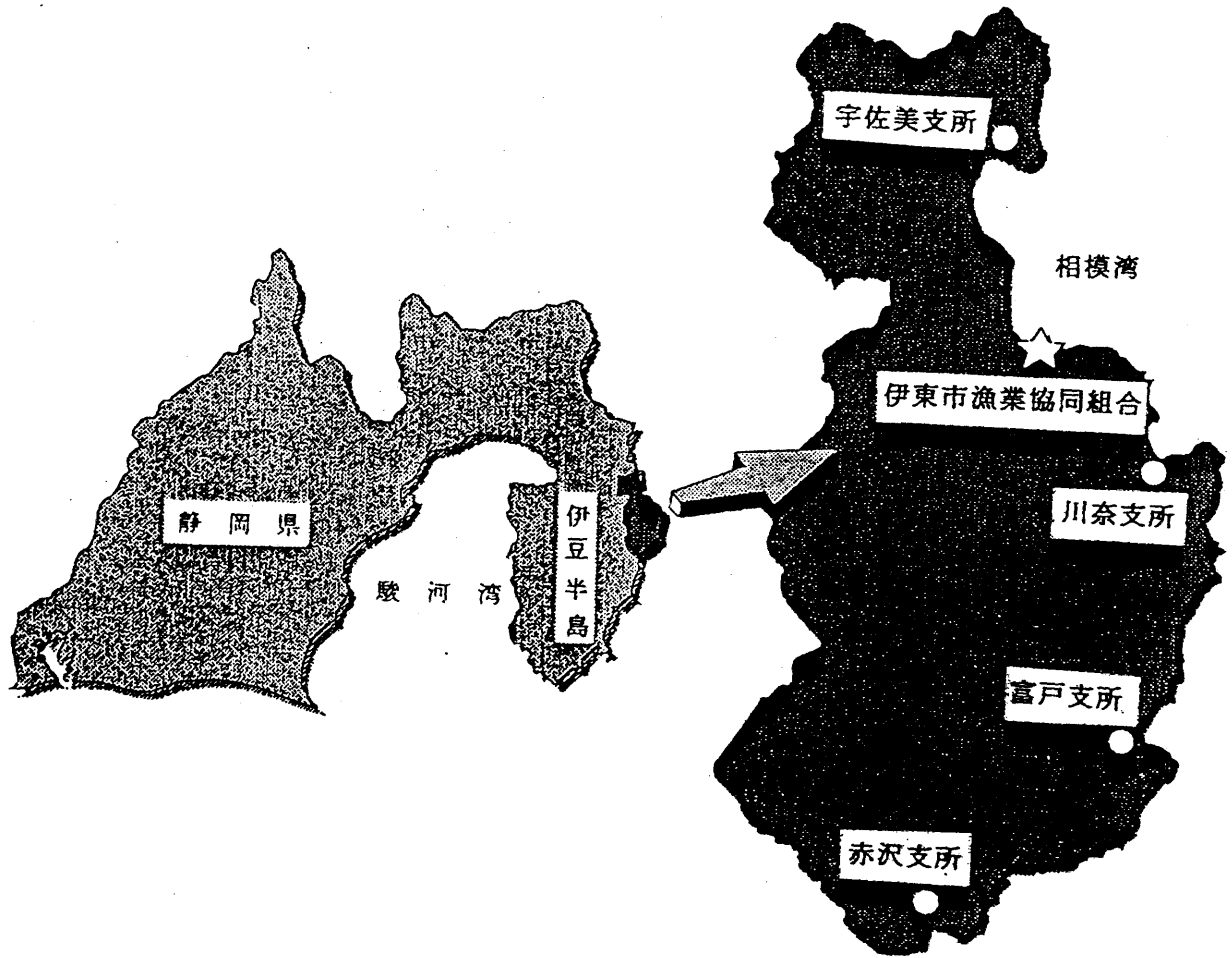


図1 伊東市と伊東市漁業協同組合の位置

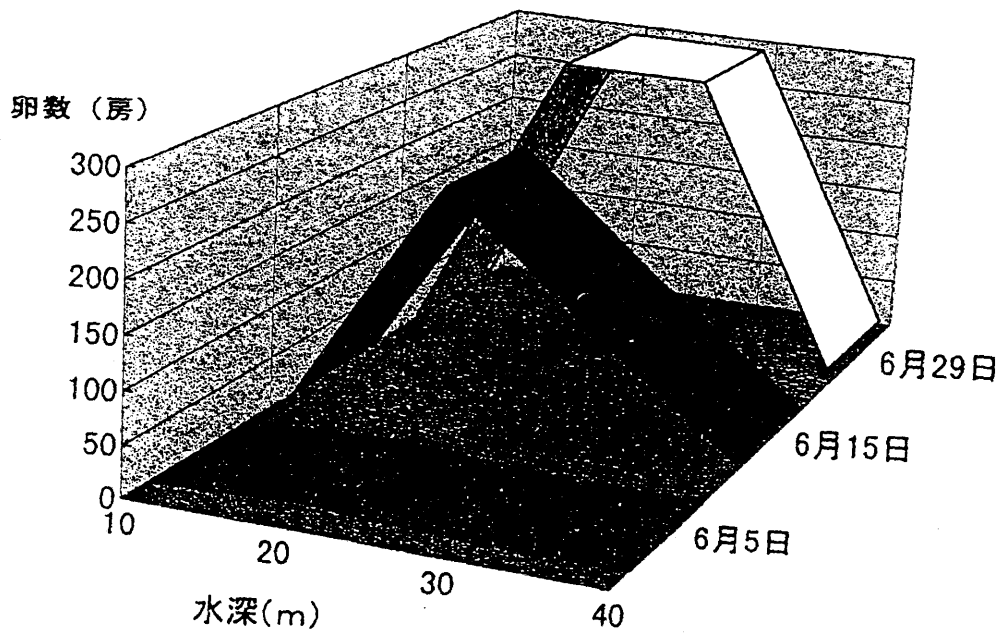


図2 水深を変えて設置した産卵かごに産みつけられたアオリイカの卵数の推移

卵数 (房)

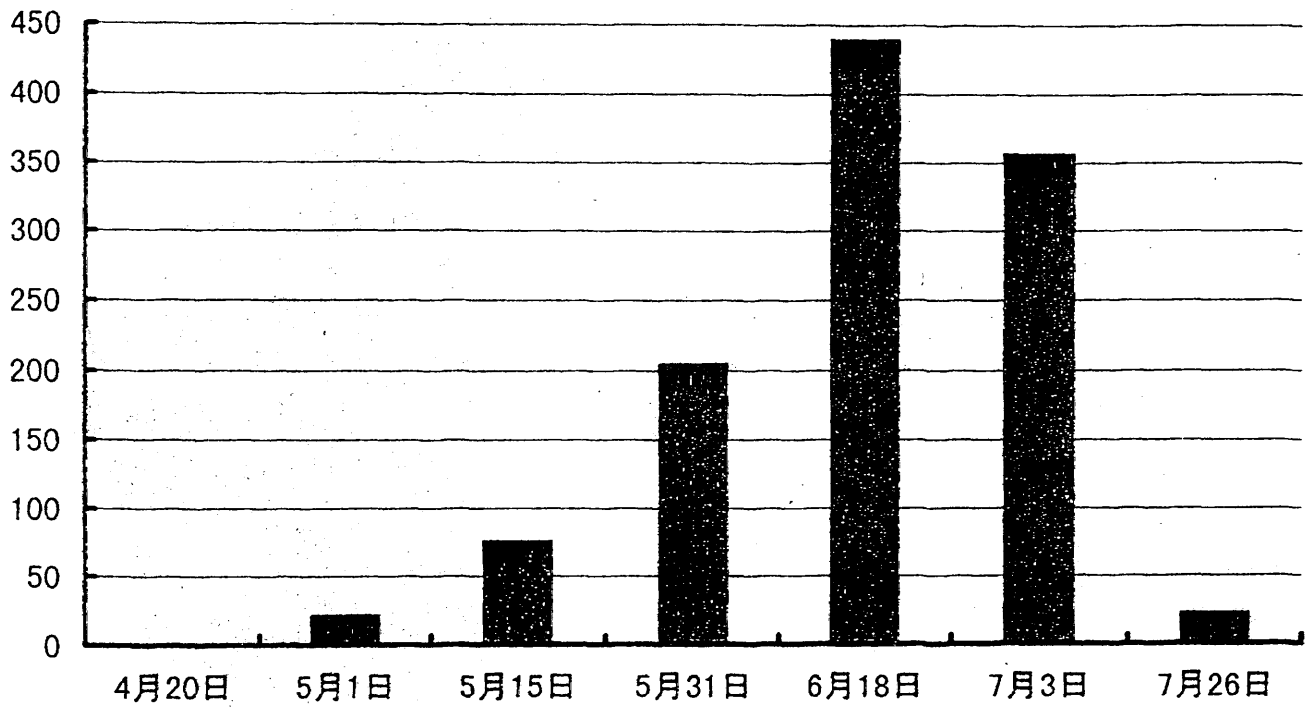


図3 そだに産みつけられたアオリイカの卵数の推移